2015 年 3 月 19 日放送

「第 29 回日本乾癬学会①　大会を終えて」

高知大学　皮膚科
教授　佐野　栄紀

はじめに

平成 26 年 9 月 18～19 日に、高知市文化プラザかるぽーとにて、第 29 回日本乾癬学会学術大会を開催させていただきました。高知大主催は 8 年振りとなりますが、その翌年より私が高知大に赴任したので、ほぼその期間に一致します。この間、生物学的製剤などの新しい治療法が認可されたこともあり、8 年前にくらべ演題数が約 6 割も増加し乾癬への興味がいかに急速に拡大したかが分かります。高知という地方都市での開催にも関わらず、会期 2 日間でおおよそ 700 名近い参加者があり、前回の東京開催（中川秀己会長）と比べても遜色のない盛会となりました。

第29回日本乾癬学会のロゴ。
原図は吉川邦彦先生（大阪大学名誉教授）の描かれた、一筆書き。

本学術大会のテーマ

パラダイムシフトを起こした乾癬治療にその理論的根拠を与えたのは言うまでもなく、乾癬の発症病態についての基礎的研究の解明です。本年の学術大会では特に、乾癬におけるメタボリック症候群との関連や、皮膚科領域以外の基礎的な免疫学的側面について掘り下げた議論を企画したく、私は本大会に、psoriasis more than skin deep（PMSD; 乾癬、もっと深く）というテーマを与えました。

特別講演、PMSD シンポジウム

特別講演は松澤祐次先生（住友病院病院長）に「メタボリックシンドロームと脂肪細胞科学（アディポサイエンス）」をご講演頂きました。先生がメタボリックシンドロームを提唱

され 10 年がたちました。その間、行政を動かして予防医学に画期的成果が上がりつつある現況を紹介されました。先生がアディポネクチンを発見されたことにより、脂肪細胞がエネルギー蓄積だけでなくホルモン、サイトカインを分泌する内分泌細胞であるという、アディポサイトカインの概念が確立したお話をいただきました。

引き続き PMSD シンポジウム１（基礎研究）では石井優先生（大阪大学生命機能研究科免疫細胞生物学教授）により、蛍光生体イメージングを用いて、Th17 細胞による骨リモデリングが示されました。竹田潔先生（大阪大学免疫制御学教授）には、腸管免疫がアレルギー反応を決定する可能性の話をしていただきました。三宅健介先生（東京大医科学研究所感染遺伝学分野教授）には、TLR シグナルの自己免疫疾患への関与を、福島敦樹先生（高知大学医学部眼科講座教授）からは、乾癬にも起こるぶどう膜炎のメカニズムを紹介していただきました。

PMSD シンポジウム２（乾癬の遺伝子）では、武藤正彦先生（山口大医学部皮膚科教授）が、多遺伝子が関与する多因子疾患である乾癬の物理方程式を提示されました。岡晃先生（東海大総合医学研究所講師）は、乾癬の遺伝学につき包括的視点からお話しいただきました。杉浦一充先生（名古屋大大学院医学系研究科皮膚病態学准教授）は、汎発性膿疱性乾癬(GPP)の多くは IL36RN 遺伝子が原因の常染色体劣性遺伝性疾患であることを発見され、尋常性乾癬とは全く別疾患である可能性を示されました。神戸直智先生（千葉大皮膚科准教授）は、GPP に関連して自己炎症性症候群につき発表されました。

PMSD シンポジウム３（顆粒球除去療法）では、武田裕司先生（山形大学医学部免疫学講座助教）による、顆粒球吸着療法(GMA) 作用機序を自然免疫の観点で紹介され、安藤朗先生（滋賀医科大学医学部消化器内科教授）は GMA が与える好中球の質的変化および血小板への影響を話されました。鈴木康夫先生（東邦大学医療センター佐倉病院内科教授）は潰瘍性大腸炎に対する GMA 治療の実際をお話しいただきました。清島真理子先生（岐阜大医学部皮膚科教授）からは GPP 以外の皮膚疾患に対する GMA の効果を紹介されました。

２日目には PMDA シンポジウム４として「乾癬本音トークへの誘い」と題し、現在の乾癬治療の問題点を、とかく企業セミナーではお話しにくいことも含めてパネラー形式で討論を頂きました。シンポジウムコントローラーを大槻マミ太郎先生（自治医科大学皮膚科教授）にお願いし、多田弥生先生（帝京大学医学部皮膚科准教授；）、今福信一先生（福岡大学医学部皮膚科教授；）、森田明理先生（名古屋市立大学大学院医学研究科皮膚科教授；）、梅澤慶紀先生（東京慈恵会医科大学皮膚科学准教授；）の、乾癬のエキスパートをパネラーとして議論が展開されました。適用から４年たち、おおよその問題点も明らかになってきた生物学的製剤の今後の立ち位置や、保険適用外のメソトリキセートの必要性の有無、あるい採用のないレチノイド（ネオチガソン）の問題など、日本の現況などが問題提起されました。ほぼ満席となった大ホールで、議論が百出する熱いセッションとなりました。来年の乾癬学会でも引き続き本音トークが継承されると聞いております。

一般演題

全国の施設より 112 題の演題を頂き、例年同様多彩な内容でありました。生物学的製剤のセッションでは、単に治療法として有効であったという報告は影をひそめ、「乾癬本音トーク」で提示されたような悩ましい副作用に苦慮されている症例報告や、使用症例の統計結果の発表（臨床研究）、あるいは生物学的製剤の新たなプロトコールの提示などが目立ちます。あらたに上市予定の２種類の抗 IL-17A 抗体についての臨床試験結果報告を１つのセッションにまとめました。このセッションは、立ち見どころか入りきれない数十人がドアの外まで溢れておりました。

会場外に立ち見聴衆で溢れる会場

企業共催セミナー、外人招聘、教育プログラム(J-PEARLS)

合計 16 枠の企業共催セミナーを立て、海外より講師招聘もお願いしました。Alan Menter (米国), Philip J. Mease (米国), Michel Gilliet (仏), John Koo (米), Robert Kalb (米国)の５人の著名な先生方にお越し頂き、最新の乾癬外用治療、心血管系の合併症、生物学的製剤による治療とその作用機序、自然免疫学による乾癬発症メカニズム、あるいは関節症性乾癬についてのトレンドにつき講演していただきました。その他の企業共催セミナーでは、乾癬のエキスパートの先生方から基礎から臨床まで幅広く最新情報をご講演していただきました。教育プログラム(J-PEARLS)は、日本乾癬学会が欧州教育プログラムを日本向けに作成したものですが、昨年より学術大会などにおいて連続的に行われています。

日本乾癬学会＆患者会ジョイントシンポジウム

山形での本学会以来の企画であった、乾癬学会と患者会の合同シンポジウムを２日目の最後に行いました。飯島正文先生（昭和大学名誉教授）には、「患者の声を行政に生かすためには」の題で講演を頂きました。飯島先生は、今までに厚労省の委員を歴任され現在も薬事分科会の委員で活躍されています。このため先生は、患者連合会が関節症性乾癬の難病指定への要望書を厚労省に提出している現状をふまえ、それに関わる医師はどういったプロセスで患者の声を生かせるかをお話しになり、患者会の皆さんで満席の会場は大変な熱気に包まれました。続いて患者会を代表して添川雅之氏がご自身の体験談を、「関節症性乾癬患者のおかれた現状と課題～私の体験と患者会活動を通じて～」の題で患者でなければ語ることが出来ない壮絶な苦悩とそれを乗り越えた喜びが語られました。

最後に日本乾癬学会「鳥居・帝国乾癬研究奨励賞」受賞式が執り行われました。

おわりに

今年の日本乾癬学会学術大会は、Psoriasis more than skin deep のテーマのもと、皮膚科以外の先生や乾癬学会は初参加の皮膚科の先生方にもシンポジストをお願いしました。皮膚科関連学会では最も勢いのある学会として、時代の潮流に乗るのも重要ですが、あくまでサイエンスを大切にしたいと思った次第です。幸いにして、参加された先生方、患者会の方々からも大変素晴らしい学会だったと沢山お褒めの言葉を頂戴し、安堵しました。演題発表された多くの会員の方々、座長の労を取っていただいた先生方、日本乾癬学会評議員の先生方、それと高知大同門会、高知皮膚科医会、本学医局員をはじめ学会運営事務局の皆様にも、お力添えを頂いたお陰と思います。会長として厚く御礼申し上げます。